
『愛してる』

g.jijō

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『愛してる』

【Nコード】

N0724X

【作者名】

g. j. j1j0

【あらすじ】

男と女の恋愛は人生を変えてしまいます。我々は1度の人生でどれだけの人と出会えるでしょうか。一つの学校、あるいは会社での出会いが運命を変えてしまう。この小説の主人公、丸山正儀は、ごく普通の青年です。ただ、ちょっと可愛らしく、曲がったことが大嫌い。その彼がとんでもない運命に陥ります。果たしてその結果は……。この小説はFC2小説に投稿しましたが、まだ連載されていません。

パーソナル・ヒストリー

きょうは何曜日だったかな。こう面接が続くと曜日の間隔が麻痺してくるな。編集職を求人誌で探すのも俺くらいだろうな。みんな取引相手にうまくとりつくろって新しい仕事先を決めてから会社を辞める奴が多いが、俺はそういうのが嫌いだ。なぜなら、育ててもらった恩義を忘れて、次の職場を探しながら働くという行為が許せないからだ。俺の場合、いままで音楽雑誌でしか書いたことがないから、他のジャンルを扱っている会社に入ればいいな、と秘かに思っている。だが、自分が考えるほど世の中は甘くない。とどのつまるどころ俺には音楽しかないのだ。モータージャーナリストになることが小さい頃からの夢だったが、そんなものは俺にメシを喰わせてくれない。ビートルズのナンバーだったら俺の筆は進む。だが、どんなに刺激的なスポーツカーのエンジン音を聞いても筆の速度は進まないだろう。それが文筆の世界である。

音楽でメロディー、ハーモニー、リズム、どれが一番大切か、と音楽関係者に聞かれることがある。しかし、俺には答えられない。なぜなら、俺には曲を作る発想と技術が未熟だからだ。言葉なら何を書きたいか、を頭にインプットすれば、単語の2つや3つすぐにイメージできるが、作曲の場合そうはいかない。たとえいいメロディーが浮かんだとしても、音感がないから実際に楽器で音を確かめなければならぬ。特に音を拾うのは馴れないから厄介だ。それに楽譜に記^{しる}すことも音楽を難しくする。さらにいえば、文章を書く人にはまったく持ち合わせのないセンスも必要である。つまり言葉をつらねるには話すことができればいつかは書けるようになるかもしれない。だが、音楽はそうはいかない。まず、ひらめきがなければいつまで経ってもいいメロディーなんてできやしない。印象に残るメロディーを生み出すにはある程度の資質とセンスが求められる。たまたま1曲ぐらいは素晴らしいひらめきがあるかもしれない。だ

が、何曲も続けていい作品を作るには相当な実力を持っていないければ実現は難しい。つまり、オリジナリティ、プラス、バリエーションがなければならぬのだ。そのうえ、楽曲のいい、悪いはみんな簡単に決める。作曲者がどんなに苦勞して作ったものでもそんなことはおかまいない。聞いて気に入らなければ「よくない」ですべて終わってしまうのだ。どこが悪いのか、と聞かれれば答えるのは微妙だ。「ノリが悪い」「インパクトがない」など、言葉を並べることはできるが、的を射た指摘というのは難しい。そもそも音楽で伝えたいものと文章で伝えたいものでは表現する内容が違うからだ。それなら作詞はどうなるのだ、と疑問を持つ人もいるだろう。作詞は言葉の韻^{いん}を考えたり、音符の数に合わせたり、言葉のリズムを考える。つまり歌うことを想定した文章だ。その点小説の文章は、読むためのものということになる。だから必然と重要なポイントも変わってくる。音楽は印象が大切だが、読む文章は意味合いが大切になってくる。おまえはどちらが好きか、と問われれば話は複雑になってくる。聞くだけなら音楽のほうが好きだ。だが、現状では音楽でメシを食えるにはあまりに課題が多い。そして時間も必要だ。そして文筆はいまは生きる糧である。

パーソナル・ヒストリー（後書き）

ファースト・インプレッション1

さて、え〜ときょうの面接先はFMクリエイトだったな、半蔵門線の終点か。まあ通うには1時間以内だし、FMって会社名だから音楽に関係する仕事だろう。求人広告には編集者急募とあったが、編集なんて会社によって月とスッポンの違いがあるから気をつけないといけない。俺は面倒な人間関係は作りたくないし、まして力関係でつき合いかたを変えるなんてやり方はごめんだ。いいものはい、悪いものは悪いといえる人間関係が望ましい。確かにレコード会社から広告をもらって、本文で「あの曲は最悪だ」なんて書けるはずがない。それでもレコード会社の宣伝マンにはいいたいことをいう。彼らの制作部のコンセプトは充分聞かし、ヒットの狙い方も吟味する。だが、音楽で1番大切なことは、多くの人に意識させることだ。どれだけ多くの人の心に印象づけるかが鍵なのだ、他には何もいらない。だから、大切なのはくどい説明より、インスピレーションだ。音楽雑誌に必要なものはこの直感を読者に与えることなのだ。音楽を言葉で並べて説明することではない。これが俺の大切にしてきたことだ。雑誌の編集なんてただでさえ忙しいのに、さらにサンプル盤を聞いたり、毎晩コンサートに行かなければならない。まあ、マスコミを集めるのはレコード会社の宣伝部やプロダクションの人間の仕事だから見に行つてやりたいが、10日間連続とか、ひどいときは30日連続なんてことがある。演歌からポップス、ロック、クラシックなどジャンルの違うコンサートが続くとだんだん気が滅入ってくる。俺はスペードのエースじゃない。コンサートの内容を読者に伝えるという指名は俺にはある。だが、興味の薄いコンサートを細部まで分析するのはすごくしんどい。集中力が持続できないからだ。その結果、すいません、今回ページがなくて5行しかないから勘弁、といって逃げるのだ。ひどい、最低、なんとでもいえ、俺は何十日もまともな夕食を食べてないのだ。家に帰っても

風呂に入っただけだ。

おっといけない、これから面接に行くところだった。昔の編集の話をしてもしようがない。え〜と平河町3丁目押尾ビルは……。この辺だよな。2階はく看板がないかな？ 3―15―2はく、ここは12―1か、ということは進行方向右だな。人に聞いてみるか。あつ花屋見つけ。さっそく聞いてみよう。

ファースト・インプレッション2

「すいません、この辺にFMクリエイトって会社知りませんか？」

「その喫茶店を左に曲がった右側のビルの2階ですよ」

「すぐわかるなんてよっぽど有名なんですね」

「だってよく花を届けますもの」

「ああ、そうか、なるほど」

「私が知らないように見えました、ショック。なぜ私に聞いたんです」

「かわいいから」

「わあ、下心まる見え」

「ついでにソバージュにも弱い」

「私、明日モヒカンにする」

「僕はもっと好きになるかもしれない」

「ああいえば、こういうのね。大人気ない、私はあなたに興味ないし」

「あっそうか、ごめんなさい、仕事中ですよ」

「教えてくれてありがとう、お札に真っ赤なバラの花を1本ください」

「1本ですか」

「はい、あなたにあげます。もう1度会えるという願いをこめて」

「えー、困ります、そんなつもりで教えたわけではありませんから」

「僕の勝手な願掛けですから、売ったつもりでそこにもどせばいいじゃないですか」

「えー、そんなことできません」

「じゃあ、あなたが仕事を終わるのをあそこの喫茶店で待ってもいいですか」

「えー、私にはつき合っている彼がいるんです」

「安心してください、この街の特色とか生活感が知りたいだけです」

「えー、そんなこといわれても困ります」

「そこをなんとか」

「えー、困るー！」

「面接があるのですいません、もう行かないと」

「私絶対行きません」

「はい、おつりはいいから、ありがとう」

「待っても無駄ですよ」

「気にしません、じゃあ」

「あ、おつりです」

俺は振り向くこともなく会社に向かった。

ファースト・インプレッション3

「右側のビルの2階だったな。FMクリエイトはと……、あつ、あつた」

結構綺麗な建物だな。エレベーターがあるが階段で行こう。しかし緊張するな、とにかく扉を開けよう。

「すみません、きょう2時から面接予定の丸山です」

「はい、お待ちしていました、こちらへどうぞ」

「ありがとうございます、報国新聞社が近いんですね、私は芸能ニュースを配信する記者もやった経験があるのですが建物を見るのは初めてです。ここでは報国新聞社と仕事のつき合いがあるのですか？」

「はい、たまにフロッピーに記事を入力することもあります」

「フロッピーに入力？なんですか、それは」

「パソコンを使ったことではないのですか？うちでは必ず必要になるですよ。まあ焦らなくてもいいです。覚えるのはそんなに難しいことではありません。ただうちのオペレーターの入力スピードと正確さはピカイチです。あなたもうちに入れば必ず身につきます」

「はあ、入れればいいのですか」

「こちらでお待ちください、いま人事部長をお連れします」

わおー、いい女だな。秘書という感じじゃないし、服飾雑誌の編集者つてとこか、まあいい。女性がたくさんいる会社に入ったことがなかったからドキドキするな。この会社に入れば楽しいだろうな。いけない妄想は捨てよう、面接に集中しないと。

「失礼します、人事部長の加藤です。はじめまして」

「はじめまして、丸山です。よろしく願います」

「さっそくですが、わが社は『FMピュア』のFM番組表と編集が主な仕事です。その他はタウン誌、ニューメディアの情報誌、単行本などがあります。これからわが社も本の編集に力を入れようと

いうビジョンを持っています。オペレーターはもうよそと比べることができない水準に達しています。だからあなたにコンピューター入力してくれなどということはありませんか安心してください。ただこれからはコンピューターの時代になると思いますから覚えなくてはいい。必ず役立ちますから」

「私もこれからはコンピューターの時代になると思います。入れればぜひ身につけたい。だけど、私はいままで音楽業界の雑誌の編集に携わってきました。だから、『FMピュア』の記事の特集やさまざまな形でアーティストをブックキングできますし、いろんな企画立案が可能です。必ずお役にたてる日が来る、そんな確信があります」

「わかりました、今回は面接の人数も多いので結果を報告できるまで1週間かかります。申し訳ありませんがそれまで待つていただきたい。あなたのような即戦力の人材が必要ですが、給料を多く払えない現状があります。そこは若い会社の可能性を信じていただきたい。このあたりでよろしいでしょうか」

「わかりました、お電話をお待ちしております。ありがとうございます」

ファースト・インプレッション3 (後書き)

の

アゲイン1

「わあ！ほんとに私が来るまで待っていたのですか」

「僕に二言はありません。たとえあなたが来てくれなかったとしてもこの店が閉店するまでいましたよ。面接は終わったし、あとは何もすることがないので」

「でもいま夜の7時半ですよ、あれから5時間以上も経っているのに」

「僕は人を待つのに5分も5時間の関係ない。本を読んでいるといつのまにか時間が過ぎてしまうのです。ただ、ちょっとたばこを吸いすぎたのとお腹が空いたな、これはいくら僕でも逆らうことができない」

「私が来ないとは考えなかったの」

「あなたが来てくれれば新しい会社にも入れるかもしれない、それが僕の願掛けといいましたよね。だから僕は運命に従ったわけです。あなたが来なかったらそれはそれでしかたないし、僕はその程度の男でしかないと納得できます。だから来ないことも8割考えたんです。そのぶん来てくれたときはとてもうれしいから」

「私はいままでどんなにかっこいい男性でも、ナンパされてついに行ったことがあります。女の子に気軽に声をかける人は魂胆が見え見えで信じる気になりませんから」

「それでもあなたは来てくれた、それだけで僕はうれしい」

「私はバラ1本に1000円を渡して、せっせと店を去ってしまった人におつりを返しに來ただけです」

「でも来てくれた」

「商品を受け取らないのに代金をもらうわけにはいきません」

「でも僕のことは嫌いじゃない」

「そんな感情ありません、あるわけないでしょ」

「会いたくない人に会いに行きますか」

「銀行の口座番号を知らされていたら振り込みました」

「僕はそんな失敗しません」

「卑怯ひきょうです」

「チャンスは何度もない、失敗は許されない」

「迷惑です、彼氏はいるし」

「そんなことはわかっている」

「あなたは私のタイプではありません」

「僕は自分の感情に素直になっただけです、悪気があったわけはない」

「そんな気持ち無責任です、私には迷惑です」

「何もきょう君を抱きたいというのでない」

「あたりまえです、会ってから10分そこら話ただけでそんなことになるはずがない」

アゲイン2

「怒った顔もかわいいですね」

「なんですって」

「まあまあ、そこまで話が進んじやったら困るよね。僕は半蔵門の平河町という街を知りたいだけですよ、ちゃんと伝えたはずですよ。あなたと毎日会うことになるかもしれないのですから」

「えっ」

「だからきょう、あなたに教えてもらったFMクリエイトに面接に行ったんです。僕の職業は雑誌の編集なんです。残念ながらモデルのスカウトではない。だから安心してください、女性を気安く誘うタイプの人間ではありませんから」

「だけどお金は返します」

「好きなように、でも近所^{おこ}に何かおいしいものを食べさせる店はないですか？僕に奢^{おご}らせてください。お腹が空きすぎて倒れそうです」

「わかりました、毎日会うのなら変なことをするとは思えないから、一緒に食事をしてもいいです。だけど私はランチでしか食べたことがないからコースでおいしいかは知りません。それでよければおいしいパスタが食べられる店を知っています。でもひとり4000円ぐらいするかもしれません、それでよければ」

「じゃあ、安いワインも飲めそうだ」

「えー、はじめて会う人にお酒を飲ませるのですか」

「飲むのは僕だけでかまいません」

「えー、それもズルい」

「僕にどうしろと？」

「じゃあ、ハーフボトルをたのみましょう」

「わかりました、僕に任せてください」

「ここのすぐ近くにイタリア亭というおいしいパスタを食べさせ

るお店があります」

「僕はイタめしでも牛めしでもなんでもいい」

「ギユウメシ??」

「まあまあ、とにかく行きましょう」

「そういえば、お互い自己紹介をしていませんでしたね。僕の名前は丸山正儀です。正義の味方に間違えやすいですが、儀はにんべんがつくのがミソです。僕自身はとも気に入っている名前です」

「私の名前は鈴木千優ちひろです。数字の千にやさしいと書きます」

「へえー、女の子らしいいい名前ですね、僕としては千といわず兆ぐらいやさしくしてほしいな。でもチョウユウなんてトップクラスの大学生みたいでカッコイイと思うんだけどなー」

「えー、変態。いまごろ優・良・可なんて評価あるんですか」

「そうか、数字かアルファベットだね。でも、変態はないんじゃない」

「そんなことよりイタリアンが先です。早くたばこを消してください」

アゲイン3

「へえー、いい店を知っているね。内装も白を基調にしたい雰囲気だ。お客さんもたくさん入っている。お薦めはなんですか」

「私はこのカルボナーラが大好きです」

「じゃ、パスタは決まり、分けて食べるから大盛りでいこう。カリカリベーコンと卵の好敵手はどれがいいかな。敢えてトマトソースを選ばないなら僕のピッツア選びは、と。何か苦手なものありますか」

「私はありません」

「じゃ、僕はシンプルなマルゲリータにしようかな、店のこだわりがわかるから。それとミネストローネスープを2つに、きこり風サラダをこれも大盛りで。ワインはハーフボトルでチーズに合う赤ワインの1500円までのものを。これでいいですか」

「私は十分です。わあ、晩御飯作らなくてすむ」

「一人暮らし？」

「実家は東京の町田。狭い公共のアパートに住んでいたから、社会人になってから飛び出したの。兄妹2人と両親が住むには2DKは狭すぎる。いまは世田谷のアパートで女友だちと2人で住んでいるの。ちゃんと部屋は別々です」

「へえー、偉いな。僕なんて車を持っているから狭いアパートで母親と姉貴と3人で暮らしている。車庫代が24000円もするから車は本当に贅沢ぜいたくだね。でも、何ものにも束縛そくばくされない空間が僕にとって一番大切な時間なんだ。だから、ドライブは行く先も決めていないことが多いんだよ」

「私車の免許はあるけどペーパードライバー。いまだに免許を取ってから一度も路上を走ったことがありません。唯一自信をもっていえる」

「そんなことに自信をもってどうするんだ」

「でも、ないよりいいでしょ」

「花屋さんって車で配達がないの」

「だってお客さんは近所の会社とか、飲食店だからほとんど歩きます。あとは店番が多いです」

「僕は花言葉も知らないし、花の種類なんてチンプンカンプン。値段なんていったら未知だね」

「無知の間違いでしょ」

「いったな、だけど僕の高校時代の友人に、女の子の誕生日に歳の数だけ赤いバラをあげたら、つき合うことに成功したって奴がいたな」

「花をもらってうれしくない女性はいないと思う」

「本当！僕は女性に花束をあげたことが一度もないな、そんなことなら研究しとくんだった。千優さんは男に花をあげたことはある」

「ううん、あげたことはないですね。だって女の子から花をあげたってもらったほうは理解に苦しむだけだと思うから。女性の花に込める思いはとて深遠なんです。言葉では計り知れない」

「へえー、そういえば彼氏の話を聞きたいな」

「わかりました」

アゲイン4

「彼は広告代理店で営業をしています。背が高くて、ちょっとシヨーケンに似ている」

「じゃあ、僕は太刀打ちできないな」
たちう

「当りまえです。それに彼は高校時代ずっとラクビーをやっていたから臍ががっしりしているの。あなたは骨と皮しかないでしょ」

「自慢じゃないけど、僕は体重が48キロしかない。これ以上痩せたらサイズもメンズじゃなくボーイズになってしまう。そうなったらセンスのいいジーンズなんて探すのが大変だよね。そんなことより彼とはどこで出会ったの」

「高校が一緒だったの。彼がラクビーの選手で私がマネージャー。とても足の速いフオワードだったから憧れた女の子はたくさんいたわ。でも、私を選んでくれた。とてもうれしかった。だけど、大学に入ったらきっぱりとラクビーを辞めてしまったの。辞める理由を聞きたかった。私にはいつてくれると思ったのに」

「それだけが心残りなんだね」

「そう、彼の本心が知れたかった。聞きたかったけど、母親にこれと思った人についていきなさいといわれていたから、素直にしがったの。私もつらいけど、彼はもっとつらいんだって感じたの」

「へえー、物語があるね。僕なんてそんな重い決断したことがないからよくわからないけど、僕ならすべて正直に話すね。だってそうじゃないとお互い支えあっていけないじゃないか。つまりラクビーを続けるのと続けないのでは歩むべく人生が違ってくるよね。そんな大事なことを一人で決めること自体おかしいよ。先輩とか監督はそのことを知っていて、つき合っている君だけが知らなかったら問題だな。一番はじめにこれから共に生きたいと思う女性に話すべきさ。先輩や監督のいうことはアドバイスにしかない、結局決めるのは本人さ。未来像を予想するなんて真面目に考えない人が多い

いけど、ある程度のビジョンをもつことは大切だと思う。そうしないと後の人生で彼が挫折したとき君は失望しかしない。まあ、男なら家族のためならどんな仕事もするだろうけど、あのとき現役を続けていたら広告代理店だけじゃなくいろんな道を模索できたはずだろ。だから何も聞かずにいていくのは、一見、日本の女性のおしとやかさのようだけど、逆に自分の首を絞めることになると思うんだ。もっと彼とよく話さなくちゃだめだよ、間違っているかな」

「ううん、間違っていないと思う。だけどスポーツ選手にはそれなりの試練とか女にはわからない考えがあると思うの。彼についていくだけ、そう決めたの」

アゲイン5

「女の子の人生なんて男によってガラッと変わるよね。安月給だったらつらいだけだし、人生設計のできない男に自分の人生を託すなんて無謀なこともしないだろう。彼がコピーライターを目指すことは悪いことだと思わない。だけど、幼い頃大人になったら就きたい職業が誰でも一つはあったじゃない。でも、実際にその職業に就いた人が少ないのはなぜだと思う」

「うまく説明できないけど資質とか才能がないと感じたか、または子供のときのイメージと実際は全く違うことがわかって挫折するんじゃないかな」

「いい線いつてる。だけど一番大切なことは最後まで諦めないことなんだ。ただ、日々努力することも必要だけどね」

「へえー、丸山さんは努力しているんだ」

「もちろん、顔で笑って心で泣いて……。あまりちゃかすなよ、いいこというつもりだったのに。あっカルボナーラもマルゲリータも来たね。さあ食べよう、ワインも口当たりが軽くてとてもいい感じだ。すごくおいしい」

「ごちそうさま、とてもおいしかった。バラより高くついてしまったわね」

「なになに、これぐらいの出費は痛くないさ。また話ができればうれしいな」

「彼氏に悪いからダメ」

「えー、僕は彼氏のライバルになれるのかい」

「それは無理」

「なんだ、まあいいさ、またこの街で君に会えるよう明日から一週間祈るさ」

「へえー、それぐらいで決まるんだ。毎朝会えるといいですね」

「それ本心？」

「違う」

「ちつともかわいくない、まあいいでしょ。じゃあね」

千優と別れてから彼女に話したかった内容が頭に浮かんた。たとえば俺がコピーライターでプレゼンに臨むとしたら、徹底的にマーケティング調査をやり、これでもか、というぐらい討論したうえで最善のコピーを引っさげていく。でも、我々のコピーより後の順番のコピーが明らかに上回っていて、うちとしてはそのコピーより上を行くコピー作らなければならなくなったとする。だが、わが社をあげて徹底的に作り上げたコピーに対して、短時間でそれを上回る作品を作るのは至難の業だ。だけどこういうときスポーツマンは強い。ラクビーならノーサイドの笛が鳴るまで逆転を諦めない。相撲の力士なら二枚腰といわれる強いねばりで、劣勢であつても可能性のある限り闘い続ける。この姿勢が大切である。諦めたらその瞬間ジ・エンドだ。千優の彼氏もそういう男だろうか。もしそうなら、いずれどこかで俺と会うはずだ。

セルフ・イントロダクション1

「リーン、リーン、リーン」

「はい、丸山です」

「おはようございます、FMクリエイトの加藤です」

「あつ、電話お待ちしていました」

「あした、10時に本社に来てください、採用が決まりました」

「ありがとうございます」

「スーツじゃなくていいですよ」

「わかりました」

「おはようございます、きょうからお世話になる丸山正儀です」

「おはようございます、企画編集部長の山岸です。きょうからうちの部署で働いてもらいます。いまちょうどニューメディアのガイドブックの編集作業が始まったところです。はじめは白石の指示に従ってください。パソコンは扱ったことがないと聞いているのでまづ慣れてください。そんなに難しく考える必要はありませんが、パソコンを利用した情報管理は早く身につけてもらいたい。わが社は校正ミスが少ないことで信用を得ているので、校正は特に慎重に行ってください。私からの注意点は以上です。白石がいまとても忙しいのでとりあえずガイドブックの前号に目を通してください。大まかな内容がつかめればオッケーです。白石の手があき次第仕事の手順聞いてください。私からは以上です」

「さっそく目を通したいと思います」

「おい、新人メシでも食いに行こうか」

「白石さん手はあいたのですか」

「いまは仕事よりメシのほうが大事だ。ランチタイムで好物がオシマイってことにもなりかねない。喫茶店BELLのランチは質量値段と三拍子揃っている。新人が最初に行くにはもってこいの店だ。したくを急げ」

「したくって本を置くだけです」

「じゃあ、行こう」

「おい、新人大学はどこだ」

「僕は大学行ってません」

「それでよくうちに入れたな。前は何をやっていたんだ」

「音楽業界誌と通信社の記者を6年ほど」

「よく大学も出ていないのに勤められたな、コネでもあったのか」

「いいえ、まったく。音楽業界誌の面接は50倍以上の競争率があったそうですが、なぜか入れました。通信社は人の紹介です」

「へえー、みんなが憧れる職場だな」

セルフ・イントロダクション2

「講英社や同協通信社みたいな大きなところはなかなか入れないけど、僕がいったところは出版社とか通信社といっても小さいですから」

「それでもマスコミで働きたがっている奴はたくさんいる。高卒が大学出と競争するにはコネと実力よ。俺も高卒なんだ。前の会社では20人の部下がいたからそりや大変だった」

「なぜ辞めたんですか、そんなにスタッフがいたら信頼も厚かったでしょうに」

「まあ、人にいえない理由があったんだ。それ以上聞くな、高卒っていうプレッシャーもあったし、いろいろあらーな。おまえも苦労するよ、高卒じゃな。でもずーっと編集で生計をたてていくつもりか。悪いことはいわねーからやめとけ」

「なぜです」

「若いうちはいいが、年とってやるのはつらいぞー」

「編集といってもいろいろあるじゃないですか、僕は編集より文章を書きたいんです」

「悪いことはいわねー、創作なんて手をだすもんじゃねえ、つらいだけだ」

「はあ、悟り^{さと}をひらいちゃったみたいですね」

「いろいろ見てきたからな」

「おまえは女が好きか」

「嫌いな男がいるでしょうか」

「本社にいる女は粒ぞろいだぞ、みんないい女だ。おまえは彼女がいるか」

「いませんが」

「うちの女性はみんな彼氏がいるみたいだ、本人に聞いたわけではないが」

「そんなもんですか、僕にはわからないな。彼氏がいるとか関係なく、魅力的女性がたくさんいるのなら、なぜ声をかけないんですか。それともいままでこの会社に彼女たちが胸を焦がすような魅力的な男性がいなかったんですか」

「いうねー、じゃあ俺たちに魅力がないと」

「だって男からなにもいわないのなら、女性だってなにもいいま
せんよ。興味がないと思うでしょう。特にいい女だったら自分から
いうなんてよっぽどのがないとありえないでしょう。この会社
の男性がみんないいと認めるなら、世の男性はみんな彼女たちに目
をつけるはずです。その人たちと比べられていると、この会社の男
性は気づくべきです。自分に引け目を感じている男性に魅力なんて
もてませんよ。自分の殻は自分で破ら^{やぶ}なければだれが破るんですか。
そんな勇気も持てないのならいい女とかいってほしくないですね」

セルフ・イントロダクション3

「かあー、きついねー、まあいい、最初はみんな元気だ。でもいっておくが俺たちだって憧れている女性社員はいる。だから彼氏がいるかいないかは確かめている。無駄な行動をしないだけだ」

「一見、大人の考えかもしれませんが、僕はその程度の言葉でおめおめと引き下がりはいらないな。だってそうでしょ、彼氏がいることがどうだっていうんです。見えない敵は大きく思えるものですよ。大切なのは自分がどれだけ愛しているかってことじゃないですか。まあ、本社の女性スタッフはチラツとしか見ていないのでなんともいえませんが、僕は自分の気持ちに嘘はつけないな。自分の気持ちだけを押し通すのではなく、公平に自分の存在を感じてもらうことが大切だと思うんです。そりゃ最初は彼氏と比べられるような存在じゃないでしょう。でもスタートライン自体違うのだから最終ゴールラインだって違うはずです。ようは最初に着くかという勝負ではなく、あなたがたとえビリでも私のころの中ではいつも一番という錯覚が大切だと思うんです。錯覚という言葉が不適切かもしれませんが」

「いや、その錯覚って大事かもしれないな。だけど錯覚だったら覚めたら終わりだ。レンズを通して見るっていうのが一番近いかもしれない。ようは恋愛モードのメガネだな。とにかく女性は自分の彼氏に対してとんでもない見方をするものなんだ。だが新人おまえなかなかやるな、仕事もそうだとうれしいんだが」

「仕事ができると勘違いしないでくださいね。僕は音楽のプロですがほかのことはアマチュアですから」

「まあ、はじめからプロなんて奴はいないよ。でもおまえは近頃じゃ珍しくしっかりとした考えをもっているから女にモテるだろう。一見かわいく見えるし、スタイルだってスリムだ。ただ、たばこを吸いすぎるな、そのペースじゃ一日4〜50本はのむだろう。酒を飲

んだら俺もマシンガンなみだが、普段はひと箱だ。もう一つうちの会社の特徴だが女性はみんなたばこを吸うんだ。おまえはたばこを吸う女性をどう思う」

「女性だけに限らず健康を考えたらやはり吸わないほうがいい。特に女性は出産があるじゃないですか、胎児にいい影響があるはずないし、でもいまたばこをやめたら太るからやめられないという人が多いでしょう。まあ、見てくれは女性の場合とても大切だから僕はなんともいえない。確かに太っている女性は僕の好みじゃない。どうしても僕とつき合いたいなら、原因がたとえ遺伝であったとしても痩せてくれることが絶対条件です」

「母親からの遺伝だったら酷じゃないか」

「僕も昔は太っていたのです。だから10代はまったくモテなかった。若い頃からたばこを吸っているけど痩せるのは大変だった。だから痩せるつらさはわかるんです。僕のこと好きならそれぐらの障害は乗り越えてもらわないと」

「酷だねー、でも俺も太った女性はダメなんだ」

「それから出産を経験して太る女性もいるじゃないですか。だから結婚前には絶対お母さんをチェックですよ」

「それじゃ、めちゃくちゃ好きな女の子のお母さんが太っていた場合はどうするんだ。しかもその子が痩せていたら」

セルフ・イントロダクション4

「そのときの状況にもよるけど、苦渋の選択ですが6割は結婚しません。いつまでもそばにいてほしい女性には輝き続けてほしいのです。僕は永遠に愛し続けたいだけなんです。この考えは間違っているでしょうか」

「当たってるとか、間違っているとかというレベルの話じゃねえな。歳を取るとそういう条件が変わるというか、見てくれより気が利くとか、料理がうまいとか、しっかりしているとか、目をつけるところが違うといったらいいのかな。新人はまだ若いってことさ。でもお父さんが太っていたらどうするんだ」

「ハハ、お父さんがはあまり考えません。ただ、遺伝だったらお嬢さんはすでに太っていると思うので」

「そんなもんかね」

「あとはランチが三拍子そろっていたら文句はないのですが」

「俺のとおっておきに驚くなよ」

「急ぎましょう」

「ところでニューメディアってなんですか」

「新人にはなにもいってなかったな。キャプタルサービスは知っているか」

「いいえ、まったく知りません」

「そこがニューメディアたる所以だ^{ゆえん}」

「つまり新しいと」

「そういうこと、うちが引き受けているのはそのキャプタルサービスのオフィシャルガイドブックだ。つまり、NNTの電話回線を使ってニュースとかゲームなどが楽しめるニューメディアだ。ただ端末機が必要だし、電話回線を使うから使用料がかかる、そこがミソよ。まあ、普及すれば値段なんて安くなると思うが、そこまで定

着するかが鍵よ。現状は確かに厳しい。だけど可能性がまったくないわけじゃない。最後はNNTが本腰をいれるかどうかさ」

「へえーNNTといたら、大学生の就職先人気ナンバー1じゃないですか。入るのはエリートばかりでしょう。どんな人たちがいるか、というほうが僕には気にかかる。そしてどんな仕事をするのか、考えただけでもワクワクしてくる」

「そんなものか、みんな普通の人間だぞ、それに各方面の企業から出向してる社員も多い」

「そこがいいんじゃないですか、大企業は新しいメディアに関心があるでしょう。生え抜きを送り込んでくるものですよ。千載一遇せんざいいちぐうのチャンスかもしれない。いろんな話を聞きたいなあー。僕みたいに勉強しなければいけないときに遊んでいた人間とは違い、彼らは常にトップクラスを歩んできたわけですよ。親の期待に背き続けた僕とは反対に彼らは応え続けてきた。弱肉強食を勝ち続けた人たちと接するなんて夢みたいですよ。彼らの実力を見てみたいものです」

セルフ・イントロダクション5

「過剰な期待はよしとしようがいいな、学生時代は苦勞したからいまはマイペースみたいな人もいるだろう。まあ、いろいろ話してみるといい。彼らは彼らなりに苦勞しているからな。おまえなんか大企業での出世争いなんて興味ないだろ、でも彼らにとっては切実な問題さ。そういう配慮をすることを忘れてはいけない。おまえはいつも自分が世界の中心みたいところがあるから氣をつけたほうがいい。みんな見えないところで苦勞しているものだ。だから相手の立場も考えてあげる必要があるってものさ」

「ランチ行列しているみたいですけど」

「鳴くまで待とうホトギスよ」

「はじめから試練があるんですね」

「人生には壁が必要よ、まあ、待ったぶんだけよろこびも大きいっていうだろ」

「そんなもんですかね」

「こんにちは、相変わらずきれいだね、千優ちゃん」

「あつ、きょうハンカチもってくるの忘れたから、嫌な予感したんだ」

「悪寒おかんじゃなくてうれしいよ」

「相変わらず口が減らないのね、正義という悪党！」

「なにそのいいぐさ、人がせっかく就職が決まったから顔を出したのに」

「だって、この間のこと彼に話したらキツクいわれたから。マスコミの連中は生活が派手だって、女はダメすし」

「ひどい偏見だなあ、彼だってマスコミじゃないか。確かにきれ

いな女の方はよく見るから目は肥えているけど、ダメじゃないよ。君は聞きそびれているようだからもう一度いうけど、FMクリエイトの社員に決まったんだ」

「この間の夜にひどい夢を見たから、あなたは私の目のまえに現れると思った。私に話しかけないでください」

「そんなにバリケードを敷かないでよ、僕は話がしたいだけなんだ」

「だけど、初対面の人と食事を一緒にしたことを彼が驚いていたわ。ナンパされるなんて君らしくないって」

「僕はお腹がすいていただけなのに」

「そうよ、あなたひとりで食事をすればよかったのよ、私もうかつだったわ」

「OK、仕事の邪魔はしないよ、こんど機嫌がいいときに声をかける」

「私、機嫌がよくなると思う」

「じゃあ、彼に早く指輪をもらうんだな、それなら僕と話せるだろう、つまらない女だ」

「私の勝手でしょ、迷惑なんだから」

「とことんかわいくない女だな」

「私の視界に入らないでくれる」

「店の前を通らなきゃ会社いけないんだ」

「あっちから遠回りすればいいじゃない」

「わけのわからないことをいう女だな、まっすぐ歩けば10歩ですむのに、なぜ迂回しなきゃいけないんだ」

「私はとにかくあなたを見たくないの」

「よくわかったよ、じゃあな……、まったく手がつけられないな」

コンタクト1

F Mクリエイイトの話をしよう。極東通信社と持ち株形式をとり、資本金は互いに出しあい1億円。隔週発行している極東通信社の『F Mピュア』誌のF M番組表と記事および構成、さらに本文の校正も引き受けている。社員数約40人。そのうちオペレーター約15人、スタッフは多いとき50人を超える。そのほかの仕事内容としてイレギュラーで年鑑、単行本などの編集。正儀が配属された編集部門のスタッフは約10人。常に仕事があるわけではないが、忙しいときはひとり数冊の本を担当する。営業は主に社長の馬場氏、部長職2人が担当。収益の半分以上は『F Mピュア』誌による。就業時間は10；00から18・00とし、遅刻3回で罰金制。一人ひとりの実力が必要とされ、ひとつの仕事を請け負い仕上げることで実績を作り、仕事を継続することで利益を生む。社員の平均年齢23，6歳。これからの会社だといえる。正儀のは記者時代の平均月収は20万円以上だが、F Mはその7割に達しない。はつきりいてバカ。この会社から正儀の運命は大きく変わってしまう。

「おい、新人。このフロッピーに入っているガイドブック用のデータを本社のオペレーターにプリントアウトしてもらってきてくれねーか」

「はい、プリントアウトで通じるのですか」

「それで十分よ。だがデータの量が多いから少し時間がかかるかな。いいか気安く本社の女に手をだすなよ。これは忠告だ」

「僕はそんなにスケコマシに見えます」

「いや、誰だってどんな新人か興味あるだろ」

「新人が自己紹介しちやいけないんですか」

「ダメ、おまえはコンピューターの前で待ってりゃいいの」

「なぜですか」

「おまえは本社の女の怖さを知らないからな」

「へえー、いい女で怖いんですか。そのうえ仕事ができる。白石さん、へんなイメージ作っていませんか」

「なにいつてる、俺のころは純白よ」

「えー、その顔でよくヌケヌケと」

「とにかく、おまえは新入社員歓迎コンパまでベールで隠しておけ。これは上司命令、わかったな」

「よくわからないけど、わかりました。無駄口はたたくなと、そして仲良くなるなということですね」

「そういうこと、さすがに頭の回転が速いな」

「褒めていただいてありがとうございます。でも僕は人なつっこいのが取り柄なんですけど」

「封印」

「あっ、はい行ってきます」

コンタクト2

「こんにちは、はじめまして今度入った丸山です」

「こんにちは、オペレーターの新田です、どうしたのですか」

「はい！このフロッピィに入っているデーターをプリントアウトしてほしいんです」

「あつ、そんなことおやすい御用よ、入っているデーター全部」

「はい」

「コンピューターは全然知らないの」

「はい、いままで原稿用紙とペンと辞書だけが僕の商売道具でした」

「へえー、明治の文豪みたいね」

「あそこまでスレちゃいません、それにあれほど高尚じゃない」

「へえー、どんなジャンルの原稿を書いていたの」

「音楽関係です」

「それでウチにきたんだ」

「はい」

「でも、ここは『FMピュア』の番組表がメインなのよ。それに番組表は地方によって放送局が違うから同じ号で6冊作らなければならぬの」

「へえー、それは大変だ。入力スピードも大切だが、校正の責任は重大だ。番組の内容なんてそんなに早く決まるものではないでしょう」

「そうね、それとスピード、正確さ、量、みんな求められるのよ」

「それを隔週か、僕には無理だな。考える暇がないんだ」

「そこが一番問題かもね。私たちは考えない、いかに正確に入力するかが大事なの」

「緊張感を持続するのは大変ですよ、僕の場合ウルトラマンより短いから」

「じゃあ、カップヌードル以下ね」

「はい、お恥ずかしい話ですが」

「素直なんだ、いまだき珍しい」

「嘘ついてもすぐばれるし」

「だけど、男って見栄を張る人が多いのに」

「メツキはメツキ、金や銀にはなれないわけで、僕はメツキで勝負します」

「勝負になる？」

「金や銀の基準で戦うのではなく、メツキの基準で戦う必要があります」

「それはどういうこと」

コンタクト3

「ひとりの女の子を、高卒の僕と東大卒の男と争うというシチュエーションで、どうやったら高卒の僕が勝てるか、が鍵になります」

「へえーおもしろそう、どうやったら勝てるの」

「東大卒が金なら、高卒の僕は金メッキ。だけど金メッキはいままでなくなることがなかった。なぜだと思いますか。それは金メッキにも価値を見出す人々がいたからです。若い女性に本物の金と金メッキのネックレスを見せて片や3万円、片や1500円のプライスであなたはどちらを選びますか、と尋ねたら新田さんはどちらを選びますか。一生もつつもりなら高いお金を出しても本物を買うべきです。ただ、取り扱いが繊細で気も使う。その点、金メッキは少々取り扱いを雑にしても気にならない。気を使ってもいいなら一生の伴侶ともなる金、気楽につき合ってみたいなら金メッキじゃないですか。取っ掛かりは何でもいい。ただつき合ってみればあなたにとって僕は金メッキじゃなくてダイヤモンドになってしまうかもしれない。人によって存在価値は変わります。巡り会わせてとても大切だと思うんです。だから、正解は金、金メッキともそれぞれ価値があり、どちらがいいかは個人差によって決まるというのが正しい答えかもしれません。東大卒に100パーセント勝てる方法なんてないのです。そんな方法があったら僕は職を変えています。東大卒に勝てる方法があるとすれば人事を尽くして天命を待つ、つまり悔いのない行動をしたら最後は僕のことを選んでほしいと神様に願うだけ」

「途中まで話の筋が通っていたけど、最後は神様をお願い」

「願いは恋愛の原動力だと思うんです、すべては受けとめてもらってからストーリーが始まるものでしょ。」

「ふーん、なるほどね。ところで彼女はいるの?」

「いいえいません」

「特定の彼女はつくらない主義？」

「そんな立場の男だと思いますか」

「私はあなたみたいタイプ好きだけどなあ」

「中身がまだ発展途上です」

「そうは思えないな、いいののもっているし、かわいいし」

「ちやかさないでください。先輩なら男を選べる立場でしょう、僕みたいなハズレくじ引くはずありません」

「ムキになるところがますますかわいい」

コンタクト4

「そんなことって、白石先輩から聞きましたよ。本社の女性はみんな彼氏がいるって。僕みたいな男に油を売っていてもいいのですか」

「彼がなにをいったかわからないけど、全部^{うの}鵜呑みにしないでね」

「どう捉えればいいのでしょうか」

「あなたポイント高いわよ」

「新田さんはきれいだから正直にいうけど、チャンスだと思っていいのですか」

「どうとつてもいい」

「ありがとうございます、明日から仕事が楽しくなりそうです。今度遊びに行きましよう、あっプリントアウトができましたね」

「ああ、残念。もうちょっとだったのに」

「白石さん、キャプタルガイド用のデータをプリントアウトしてもらいました」

「おー、新人はえーじゃないか、関心々々。上司の指示を守る、当然だがな。ところで誰に頼んだ」

「新田さんです」

「彼女もフルカブだが、結構いい女だろ」

「確かに、きれいでしたね」

「おまえのタイプか」

「はい、彼女は大人ですよ。僕より年上じゃないかな」

「おまえいくつだっけ」

「26です」

「彼女は確か今年27歳だったはずだ」

「いけね、ためぐちで話してしまった」

「なにを話した」

「白石さんの悪口」

「なんだって」

「話すことを全部鵜呑みにするなと」

「そのほかは」

「なにも」

「それだけか」

「はい、そうです。話すなといわれたじゃないですか」

「俺は本社の連中に印象がよくないからな」

「なにか原因があるのですか」

「まともに話していないだけだ」

「印象を良くする努力もしていない」

「働く部門が違うからな」

コンタクト5

「そんなこといい訳になるんですか。自分の仕事を見せびらかすのもどうかと思うけど、白石さんは『FMピュア』をじっくり読んだことがあるんですか」

「忙しいから見てないな」

「彼女たちの仕事を理解しようとは思わないんですか」

「お互いさまよ、向こうも俺たちの仕事なんて理解してねえ」

「それじゃあ聞きますが、どうしたら理解し合えると思いますか」

「仕事のこととか、どんなことに興味があるかだとか、いろんなことを話し合うことだろうな、難しいが」

「なぜ、違う部門というだけで、そんなにハードルが高くなっちゃうんですか。見てみないふりなんてよくないですよ」

「そうか、俺は前しか見てないからな。たまには本社の男と酒を飲むが、奴らとはあまり仕事の話をしねえな。本社の人間に仕事に行き詰ったなんて話をする奴はいねえよ。ましてや違う部門の人間に愚痴をこぼすこともない。奴らは自分たちがこの会社の主役だというプライドがあるんだ、俺たちを下に見ているのさ」

「僕は入社したばかりだから会社の仕組みがよくわからないけど、よくないところがあるのは感じませんか。彼らが主役でいいじゃないですか、実際に彼らがうちの会社の利益の大半を稼いでいるのは確かでしょうから。でも僕が納得がいかないのは、どちらが上でどちらが下なんてことを、仕事をするうえで意識するのはおかしいと思うんです。白石さんのひがみ根性がそう感じさせるのではないですか」

「いいにくいことをはつきりいう奴だな。確かにおまえのいう通りだがこればかりはどうにもならねえ。おまえが革命を起こして会社の空気を変えるしかねえな。おまえは俺たちの部門がいくら稼いでるかなんてわからないしな」

「ひとつの雑誌をいくらの単価で引き受けて、どれくらい儲かるかなんてわからないですよ。会社によって利益が少なくても仕事がないよりかマシみたいなのところもあるし、また実績があるからといってメチャメチャ単価の高いところもある。まあ、うちの部門は後者じゃないことは確かでしょうけど。でも新人頼みなんてちよっと情けないですね」

「俺が率先する立場じゃない、できるくらいならとっくにやっているさ。ましてや俺が本社の女に愛しているといくらいったって相手にされねえからな」

「また、いう前におじけづく、もっとコミュニケーションをもちましょう。まあ、すぐには無理だろうけど、彼女たちだってそんなひがみ根性をもった人に魅力なんて感じませんよ。本社にいい女がたくさんいると白石さんも感じているんだったら張り合わずに仲良くしましょうよ。いい女がたくさんいるのにみんな外にとられちゃうなんて悲しいですよ」

「いっとくがおまえが一番いい女とつき合うなよ」

「そんなことわかりませんよ」

「俺の嫌な予感はあるんだ」

「それならもっといいことに使ってください」

「使い方がわからねえーんだ」

「本当に世話がやける」

シークレット1

正儀はつぎの日会社を休んで自宅にいた。

「ドンミュージックですか。社長の佐川さんはいらっしゃいますか。あつ、おはようございます、丸山です。今度会社が変わりまして、しばらく音楽雑誌から離れることになりました。新しい会社でジャンルの違う雑誌を作ることになったんです。それでといっちゃなんです、おたくのアーティストで花を題材にした新曲を出す予定の歌手はいませんか。おもしろい企画があるのですが……。全然そんな話はない、わかりました。なにかおもしろい話がありましたら声をかけてください、よろしく願います」

こんな電話FMクリエイトでできるわけねえよな。世話になった会社に連絡しとかないと。きょう一日電話で終わっちまうな。まあいいや、だけど千優は本当に心配だな。このままじゃますますかたくなになる。ふたりの仲を壊そうとは思わないが、視野が狭すぎるし、あとで後悔だけはさせたくない。よしここはひとつアプローチしてみるか、乗りかかった船だ。

「ファーストプロダクションですか。社長の井上さんはいらっしゃいますか。おはようございます、丸山です。今度会社が変わったんですよ。おたくのアイドル歌手の入江良子新曲そろそろ出さないんですか。えっ3か月後に出す予定。仮タイトルが『赤いバラのエチュード』。ちようどおもしろいアイデアがあるんですよ、いまからお伺いしてもいいですか。じゃあ1時間後に」

「おはようございます、井上社長。おひさいぶりで」

「3か月ぐらい顔を見てなかったな」

「ちよつと仕事に行き詰ったものですから」

「ニースフェイスの記者を突然辞めていたからびっくりしたよ」

「会社に不満はなかったのですが、僕はニース向きの性格では」

ないにつくづく感じたものですから」

「君の才能は僕もよく知っているからな、ニュース記事ばかりを書いて満足するとは到底思えない。辞めた理由もそんなところだろう」

「はい、おっしゃられるとおりです。思考の介在しない文章を書くことに耐えられなくなったというのが本音です」

「5W1Hは文章の基本ではないのかね」

「確かにそうですが、それは文章の勉強をしている人には当てはまりますが、ある程度経験のある人間にとっては苦痛でしかありません。数学の基本問題ばかりやっているのと同じで応用問題ができないなら進歩がありませんし、実力もつきません」

シークレット2

「なるほどそれで辞めたというわけか。ところできょうはどんな話があつてきたのかね」

「はい、入江良子の新曲キャンペーンの件です」

「『赤いバラのエチュード』に興味があつたようだが」

「はい、新曲のコンセプトが知りたかつたんです。おもしろいキャンペーンのアイディアがあつたものですから」

「じゃあ、うちの制作部の堀田がいるから詳しい話を聞くといいだろう。いま呼ぶから」

「ありがとうございます」

「はじめまして、丸山正儀です」

「はじめまして、制作部の堀田淳です」

「さっそくですが、入江良子の新曲第2弾『赤いバラのエチュード』のコンセプトをお聞きたいのですが」

「良子のデビューシングル『青春の雨音』はご存知でしょう。ミディウムテンポのバラードでスマッシュヒットを記録しました。でもデビュー曲は少し乙女チックだったかなと反省しているんです。内容は女の子の伝えたいけど伝えられない秘かな思いをうたったものですが、男性ファンよりむしろ女性ファンに共感と呼んでしまつた。同性に人気が出るのは悪いことじゃないが、今度はさらに男性ファンの心をつかみたい、と考えていたのです。『赤いバラのエチュード』はまずエチュードというフランス語が雑誌を読んでいたとき目にとまつた。ピンと閃いたのです。そして調べたら音楽や絵の練習作品といった意味がある。これでいこうと思ひました。つまり予行演習。歌の主人公が思いを寄せている男性の目には別の女性しか映っていない。だから主人公は自分の思いよりも、秘かに愛している男性の幸せを後押しする。そんな儚い乙女心を表現したい。そ

んな狙いで4人の作詞家に作品を依頼しました。あさつてが締切りなんです」

「あんなにかわいい入江をあしげにするなんて僕にはとても考えられない」

「入江自身も相手にされなかった経験があるそうです」

「彼女いくつでしたっけ」

「15歳です」

「15歳のアイドル歌手にはちょっと難しい内容かもしれないけど、入江にそんな気持ちがあると知ったらファン層も広がるかもしれないですね」

「まあ、設定は演歌のようですがあとは作詞家のセンスしだいです。あっ、忘れていました、もちろん曲はできています。いま聞かせます」

シークレット3

「いいメロディーですね、この曲いけますよ」

「飯島先生の自信作です」

「あの飯島和彦ですか」

「はい、そうです。入江のために渾身の作品を用意してくれました」

「すみません、考え方を統一しておきたいのでいくつか質問してもかまいませんか」

「はい、どうぞ」

「まず、タイトルの赤いバラのコンセプトを話されなかったと思いますが、やはり情熱の赤いバラですか」

「あつ、すみません。そのとおりです」

「そしてエチュードを予行演習といわれましたけど、あとのほうで後押しともいわれた。予行演習と後押しでは意味が違うと思うのですが」

「私を踏み台、つまりバネにしてという意味ですのでどちらでもかまいません。私を利用してほしい、あなたの力になりたいの、そんなところですよ」

「ここはとても大切なところなのではっきりしておきたいのですけど、アシストなら僕のプランはもの凄く価値があるキャンペーンになると思います」

「どんなプランのですか」

「名づけて『ばらばらプロポーズ大作戦』です。良子が恋のアシスト、あなたに代わって恋する彼女に100本の赤いバラを届けて愛のメッセージを伝えますというものです」

「なるほどこの曲のメッセージにぴったりですね、コピーもいい」「ありがとうございます、でも作詞家の歌詞も検討しなければなりません」

「じゃあ、今度の会議に丸山さんも出席してくださいませんか。作詞、作曲、編曲者にうちのスタッフとレコード会社の制作と宣伝部が一堂に集まりますから、もちろん良子も」

「わかりました、なんとか時間を作ります」

「お願いします。ところで丸山さんも作詞をするんですよね。本田恭介の『ミッドナイトランナー』は丸山さんの作品だって井上社長から聞いたことがあります。僕はあの曲好きだったなあ、でもどうしてg. j. j i j oというペンネームなんですか。僕は外国人だとばかり思っていました」

シークレット4

丸山の目が曇った。そういえば酒の席で井上社長に自分のペンネームを話してしまったことがある。できれば誰にもこの由来を話したくないと丸山自身は思っていた。とにかく信じられないくらいダサいのだ。発想があまりにも安直でこの世から抹殺しなければならぬ、と真剣に考えていた。だが10代のころに思い描いた夢を捨てるようで、正儀はどうしてもこのペンネームを捨てることができなかった。そして力のない声でぽつりといった。

「いまどきあんなペンネームを使う人がいないからです」

「本当にそれだけですか、そうとは思えないな」

「ジョージでは偉大な人が多すぎて……」

「じゃあ、g. j. はなんの略ですか」

「ジョージじゃいいにくい人もいるだろうから後でゴロを合わせたのです。ジョージェイなら覚えやすいでしょう」

「本当ですか、僕は納得がいかないな」

「深い意味なんてありません」

「わかりました、じゃあ『ミッドナイトランナー』はデビュー作ですか」

「作詞家としてデビューしたのは『ミッドナイトランナー』ですが、その前に2作品の作詞を手がけました。ただし採用はされませんでした」

「でもあの曲は本田恭介のイメージにぴったりですよ。夜、高速、雨、疾駆そしてハーレーダビッドソン」

「ロックンロールでしたし、メロディーも音符の少ないシンプルなものだったから、作詞家と呼ばれる人ならだれでもあれぐらいの作詞はできますよ」

「そうかな、信じられないな」

「それにあのタイトルは第一志望じゃない」

「じゃあ、タイトルが他の楽曲と同じだった」

「そうです、僕は自信をもって『ミッドナイトハイウェイ』にタイトルを決めてレコード会社のディレクターのところへ原稿をもつて行った。そしたらいきなり怒鳴られました。おまえは本田恭介をキャンディーズの二番煎じにするつもりかと」

「キャンディーズってあの『年下の男の子』の。彼女たちが『ミッドナイトハイウェイ』をすでにうたっていたんですね」

シークレット5

「そうです、僕もシングルならある程度わかりますが、アルバムの楽曲までは目がいきとどきません。そのときはとても驚きました。あのキャンディーズにそんな曲をうたわせるディレクターや作詞家がいたなんて。だから『ミッドナイトランナー』に変更したのです。まあ、同じタイトルの曲はたくさんありますが、当時のディレクターはキャンディーズに引かなかったようで……。世の中は日本といえども広い、素晴らしい才能をもった人がいるのだ、と改めてわかりました」

「僕もそういう経験がありますよ。でもそのディレクターはよくキャンディーズを抑えていましたね。見習わなければいけない」

「プロダクションの制作部とかレコード会社のディレクターなんて調べものが多くて大変ですよ。つねに一步先を行かなければならないから」

「僕はこの業界に入ってまだ2年ですが、一步先なんてまったく見えません。行き当たりばったりのことが多くて、対処するのに四苦八苦です」

「はは、2年続けられたらかなりの大物ですよ。僕はヒット作品が出せなくてクビになったディレクターを何人も見ていますから。ところで新曲のキャンペーンの件ですが僕のほうから井上社長に話しますか、それとも堀田さんのほうからお話になります」

「入江のマネージャーとも話をしてから社長に伝えたいので2、3日いただきたい」

「わかりました。プレゼン用の資料はもちろん私のほうで近日中に用意します。キャンペーンの概要も2、3日あればかなり詰められると思います」

「そうしていただけるとありがたい。入江のためにも頑張りますよう」

「じゃ、このへんで僕は失礼します」

外に出るとさわやかな春風が吹いていた。正儀は今後最も大事なことは当選者の選び方だと考えていた。最初彼は良子宛てのラブレターを書いてもらい、その中から優秀なものを選べたらいいと考えていたが、無理なことはわかっていた。発売まであと3か月しかないからだ。間違いなく厳正な抽選になるだろう。この企画で天国と地獄を味わう人が必ずいるはずだ。だけど、勇気をもつことの大切さをひとりでも多くの男性に経験してほしい、と正儀は願っていた。日本中がこの話題で沸くことを期待しながら……。

スケジュール1

「よっ、ひさしぶり千優ちゃん」

「もう、話すことはなにもありません」

「そこまで嫌わないでよ。きょうは世間話じゃなくて仕事の話なんだ」

「えっ、仕事ですか？」

「アイドル歌手の入江良子は知っている？」

「ええ、今年鳴物入りでデビューした大型新人でしょ」

「彼女の第2弾シングルが3か月後に正式に発売されることになったんだ」

「それがうちの仕事とどんな関係があるんですか」

「話は最後まで聞いてよ、そのタイトルが『赤いバラのエチュード』っていうんだ。エチュードってどういう意味か知ってる？」

「英語ならある程度はわかるけど、全然知らないから英語じゃないですね」

「へえー高校では英語をしっかり勉強したんだ」

「まわりくどいい方はやめてもらえませんか、私は忙しいんです」

「あーごめん、エチュードはフランス語で絵画や音楽の練習作品という意味があるんだ。だから直訳すれば『赤いバラの絵の練習作品』という意味になる」

「そのことがなにか」

「赤いバラって情熱って意味があるじゃない。だから、新曲キャンペーンで『良子のばらばらプロポーズ大作戦』。あなたに代わって良子が愛のキューピット。100本の赤いバラを届けてあなたの熱いメッセージを伝えます、というものなんだ。当選者は30人を予定しているんだ。千優ちゃんの店で赤いバラ3000本さばけたら結構大きいだろ。明日の午後までに見積もりを作ってほしいんだ

けど大丈夫？よくオーナーと話し合ってくれる」

「バラ100本ですか」

「そう、それで配送も千優ちゃんの店にお願いしたいんだ。ファ
ンからのメッセージと一緒に入江本人のコメントをつけるからそれ
を配達してほしいんだ」

「わかりました、明日の午後でよろしいですね。オーナーとよ
く話し合ってみます」

「OK、よろしく頼むよ」

明日の午後にはプロダクションのファーストに行かなければなら
ない。まいったな、白石さんに怒られるよな。入社早々からアルバ
イトなんていえるわけないし、困ったな。

スケジュール2

「こんにちは、千優ちゃん。合計額はできてる」

「はい、1本120円でトータル36万円です」

「それは税込みで、配送費も込みでいいんだね」

「いいえ、配送費は別です。全国30か所となると結構かかりますから」

「千優ちゃんが行くわけないよね」

「まさか、業者さんにお問い合わせします」

「わかった、予算的にも問題はない。あとはこのキャンペーンをどうやって成功させるかが残された課題だ。このキャンペーンはテレビ、ラジオ、紙媒体、レコード会社、そしてプロダクションが参加することになったからかなり大々的になる。千優ちゃんもいまの大衆文化を作っているんだ、という気持ちで参加してくれたら僕はうれしいな。そして30人の男性の思いが意中の女性に伝わったらこれ以上の幸せはない。そうになったら良子も喜ぶだろう。そして初登場1位になったら願ったり叶ったりだ」

「雑誌の編集はそんなことまでやるんですか」

「そうだね、僕らの仕事は本だけ作ればいいというものではない。ニーズがあればラジオの台本を書いたり、広告のコピーを考えたり、作詞をしたりと、やれといわれたらなんでもやる。だからつねにアンテナをはって、自分からいろんな場所へ行く。どこにチャンスがあるかわからないからね。そしてチャンスを掴んだらみんなの期待に応えることが大切なんだ。イメージを形にすることは難しいが、成功したときの気分は最高さ。これは僕らしか味わうことができない。たとえば千優ちゃんが今回参加して入江良子が初登場1位になったら、千優ちゃんの仕事も必ず1位の礎いしずえになっているんだ。人間なんてひとりではたいしたことはできないけど、ひとつの目的に向かって集まったときすばらしいパワーになる。この大波を制する快

感は一度味わったら忘れることができない。僕の生きてる証あかしとい
ってもいいほど価値があるものなんだ」

「正儀は素晴らしい仕事をしているんですね」

スケジュール3

「つらいことも多いけどね、でもFMクリエイイトでは本を作ることに専念する。音楽関係の雑誌の編集はできそうもないからさ。まあ、空いた日にアルバイトをするさ」

「私は花が好き、だからいつも花に囲まれているいまはとっても幸せです。この幸せをみんなに配ることは私の役目だと思っているんです。だけどみんなで喜ぶなんて、高校時代のマネージャーの時しか味わっていないな。その感覚忘れちゃいけないんですね」

「千優ちゃんは高校時代にすばらしい経験をしているよね。僕なんか高校は私服だったから、学校帰りに友だちと吉祥寺のジャズ喫茶に行って、バーボンを飲んでたばこをふかしていた。いま考えたらませたガキだよ。ジャズのこともなんかまったくわからないくせにジョン・コルトレーンのサックスに酔っていた。たちの悪い高校生だったな、いまの仕事はそのとおりかな。あつ、時間を取らせちゃったね、また顔を出します」

「今回の仕事ありがとうございます」

「どういたしまして僕は千優の笑顔が見ることができてとてもうれしい、じゃあね」

道すがら正儀は千優が少しでもマスコミの仕事に触れただけでいい、と考えていた。そうすれば自^{おの}ずと彼氏の仕事が理解できる。こういうことはいくら口でいってもわからない。ただうけながすだけだとCMのどこに価値があるのかわからないし、発想のセンスなんて考えもしないだろう。正儀は彼女のためだけにこの企画を考えたが、それはいうべきではないと心のなかで念を押した。あまりにも重いハンマーだし、彼女には迷惑と感^{おの}じるだろう。ただ正儀はやりがいのある仕事につくことの大切さ、お金だけでは量れない生きがい^{おの}を千優に伝えたかった。そして彼女もその気持ちを共有してい

ることに安堵するのだった。あとはFMクリエイトの仕事に頭を切り替えよう、3日間の遅れを取り返そうと決意していた。

スケジュール4

「おい新人、入社そうそう3日間も休むとはどういう了見だ。連絡をくれたのはいいいが、おまえが来なかったからキャプタルサービスに行くのが2日遅くなったぞ。締め切りに合わせてスケジュール作ってんだからこれ以上メチャクチャにするなよ」

「すみません、ひどい腹痛と下痢と熱が出ちゃって」

「まあ、今回は大目に見るけど、今後気をつけてもらうからな。これからのスケジュール表をよく目を通すように、返事は」

「はい、わかりました」

だが実際正儀はこの3日間新曲キャンペーンの資料作りでほとんど寝ていなかった。まだFMの仕事に頭が整理できていなかったが、そんなことはいつてられなかった。さらに白石の甲高い声が頭に突き刺さる。

「それと、キャプタルサービスのガイドブック担当者と上司も紹介するから言葉に気をつけろ。おまえは大企業を相手にするのは初めてだったな。気を使うことも勉強だ、わかったな。それじゃ支度をしろ、すぐに出かける」

驚いたな、こんなビルにオフィスがあるんだ。家賃はひと月400万円をくだらないだろう。緊張するな。

「おい、新人ずいぶん口数がすくねーな。まさか驚いてんじゃないよな？」

「その驚いています」

「やっぱ、ハタタリもあるんじゃないか、おまえだってこんなビルでいつも仕事がしてみたいだろ。エレベーターが10基も20基もあって。NNTもそういうところにはお金を惜しまないのさ。社員意識にはお金も必要ってもんよ」

スケジュール5

「FMクリエイトとはえらい差だな」

「まあ、俺たちには一生かかってもこんなところの社員にはなれねーわな」

「僕はFMのほうが好きですよ。なんか堅苦しくて、これじゃおいそれと弁当も食えないじゃないですか」

「確かに、みんな会議室で食べるんだ」

「それにみすばらしい弁当なんてここじゃ食べられませんよ」

「のり弁ってわけにはいかないわな」

「でも、赤坂の一等地で会社も多いから食いものには困らないぞ」

「目移りするだけだと思うんですが」

「誘惑には免疫をもっていたほうがいいぞ」

「赤坂で誘惑されたらあとが怖いですよ」

「怖かったら行かなきゃいいだろ」

「でも行かないとわからないし」

「どうしたいんだ」

「給料の多い人に出してもらおう」

「いい女じゃないんだからな、無理だ」

「月末までお金がもちますかね」

「そりゃ心がけしだいだ」

「いままで白石さんはどんな昼飯を食べていたんですか」

「いつもみんなと一緒に食べに行ったからついていくだけだ」

「具体的には」

「日替わりメニューのところがほとんどだ」

「予算は？」

「1000円あれば心配ない」

「ひと月約3万円か、ずいぶんきついですね」

「あほ、普通だ」

「F Mの給料の約4分の1じゃないですか」

「使い道は決めておいたほうが無難だ、俺もお金は貸せないからな」

「夜はもつと華やかじゃないですか。みんなで飲みに行くことも多いんですよ」

「そこそこのつき合いはある」

「えー、ピンチじゃないですか」

「どうにかなるもんだ」

「デートなんてできないですよね」

「見栄をはらなきゃできるだろそんなもん」

「1000円や2000円というわけにはいきません」

「それじゃ女に出してもらえ」

「そんなことできるわけないじゃないですか」

「文句は社長にいえ、戦闘開始だ」

ビッグゲーム1

白石と正儀は10階までの専用エレベーターに乗り3階で降りた。そこから左に曲がった角の部屋はガラス扉が大きく開けられ、白石が足早に歩いて行くとすぐに受付があった。正儀は一步踏み込んでその光景に驚いた。とにかく広い。一部屋ぶち抜きのおフィスは10セクションに分けられ、一つひとつが島のようにデスクが並べられている。上司が正面に座り、その斜め前を部下がお互い向かい合いながら並ぶという配列だった。正儀は思った。お客さんが来たとき、これだけ見渡せたら確かにみつともなくてデスクの上で弁当を食べることができない。ましてや人数は100人を超えるだろう。男性はスーツ姿、女性は制服を着ている。やはり見栄えというは大切だ、というのが正儀の第一印象だった。有無もいわけない雰囲気がある。オフィスに入った途端、いかにもなにかあるという存在感。この重厚さは一朝一夕でできるものではない。端末機とテレビ画面は入り口に並んでおり、ここを通れば否応なしに目に入るし、どんなものか興味をもたない人はいないだろう。この部屋の配列を考えた人はかなりできる、と正儀は直感した。白石は受付の女性に会釈して、左側のデスクの島に向かって歩き出した。部長席の右前側のデスクに座る中年の恰幅の良い男性の前で足を止めた。そして微笑みながらいった。

「こんにちは、大野さん、今度うちに入った大型新人を紹介します。丸山正儀です」

「こんにちは、編成部の大野です」

「はじめまして丸山正儀と申します」

「おいおい、時代劇じゃないから申すはないだろ。大野さん、彼はずっと音楽畑でやってきたんです。『FMピュア』につられてうちに入ったのです。すこし手がかかりますがご指導のほどよろしく願います。おい、大型新人挨拶しろ」

「音楽以外の本を作るのは初めてなので、初歩的な質問をするかもしれませんが、今後ともよろしくご鞭撻ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724x/>

『愛してる』

2011年12月20日21時47分発行